

'24

前期日程

## 小論文 2

(共同教育学部 音楽, 美術, 保健体育専攻を除く)

### 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は1冊(2頁)、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。





**2** 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

クロス表は、異なった性質をもつカテゴリ(グループ)間の比較——たとえば男女、普通科・専門学科高校など——を行うのに用いられる。調査のデータからカテゴリを作成する方法として2つの変数から4類型をつくるということがよくある。

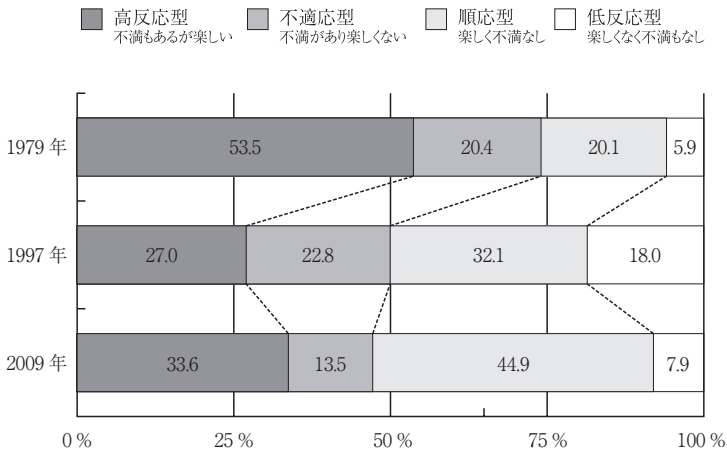


図1 高校生の学校適応類型の変容

出典：高校生の進路と生徒文化に関する調査

図1に示す例は、高校生の学校適応を「学校生活は楽しい」と「この学校のやり方に不満がある」という2軸(変数)から捉えようとする試みである。すなわち、それぞれについて「はい」「いいえ」の組み合わせから「高反応型」(楽しいに「はい」・不満ありに「はい」), 「不適応型」(楽しいに「いいえ」・不満ありに「はい」), 「順応型」(楽しいに「はい」・不満ありに「いいえ」), 「低反応型」(両方ともに「いいえ」)とした。

これは同一の学校(11校)を3時点で調査したデータから4類型を作成したもので、1979年には、学校が楽しいが不満もある「高反応型」が53.5%となっている。これは、学校が生徒にとって重要な場所であることを意味していると解釈できるのではないかと考えている。他方、楽しくもなく不満もない「低反応型」

は、5.9%にとどまっている。

しかし、1997年では、「高反応型」が27.0%と1979年から半減するとともに、ごく少数派であった「低反応型」が18.0%と大きく増加している。このことは、生徒の生活世界に占める学校の比重が低下していることを指し示しているように思われる。1990年代は、バブルが崩壊するとともに、それ以前の受験競争の激化や管理的な教育への反省からゆとり教育へと舵がきられた時代だが、そのなかで生徒の学校への関わり方が変容していることを伺わせている。

(後略)

出典：大多和直樹(2021)「コラム5 4類型をつくる」, 耳塚寛明監修・中西啓喜編著『教育を読み解くデータサイエンス データ収集と分析の論理』ミネルヴァ書房

※同文献では図1に誤記があったため、図の本体については、図の引用元である樋田大二郎・荻谷剛彦・堀健志・大多和直樹編著『現代高校生の学習と進路』学事出版、2014年所収のものと差し替えた。

問 筆者は、図1の1979年から1997年にかけての変容を根拠に、下線部のように述べている。

では、1997年から2009年にかけては、生徒の学校への関わり方の変容についてどのようなことが考えられるか。図1をふまえて、あなたの考えを400字以内で述べなさい。